

[B] 東アジアとの外交

中 国 関 係	朝 鮮 関 係
618年 唐の建国(隋を滅ぼし、都を<u>長安</u>におく) 630年 最初の遣唐使(皇帝に臣下の礼をとる朝貢形式) → <u>大上御田綱</u>を派遣(614年に第4回遣隋使としても渡航) 目的=①唐の先進的な文物・制度の輸入・②日本の国際的地位の向上 ex. 唐の朝貢に際する新羅との席次争いで大伴古麻呂が抗議(753) 8世紀 遣唐使の航路変更(新羅との関係悪化が背景) 北路 → <u>南島路</u> → 南路(東シナ海を横断する危険な航路) [遣唐使(2隻→4隻500名「よつのふね」・19回任命→15回渡航)] 702年 <u>粟田真人</u>……遣唐大使として入唐(大宝律令の編纂に参加) 遣唐使復活 <u>山上憶良</u>……遣唐少録として入唐(歌人として『貧窮問答歌』が代表) 717年 <u>藤原宇合</u>……遣唐副使として入唐(藤原不比等の子で式家の祖) <u>玄昉</u>……帰国して橘諸兄政権を補佐した僧侶→筑紫観世音寺に左遷 <u>吉備真備</u>……帰国して橘諸兄政権を補佐した地方豪族→のち右大臣となる <u>阿倍仲麻呂</u>……唐朝に仕えるが、帰国できず唐で客死(唐名=朝衡) ★玄宗皇帝に重用され、李白・王維らの文人と交際 <u>井真成</u>……帰国できず唐で客死(中国の西安で墓誌が発見される) 752年 <u>藤原清河</u>……帰国できず唐で客死(藤原房前の子で遣唐大使として入唐) 804年 平安最初の遣唐使(橘逸勢・空海・最澄らが渡航) 838年 実質最後の遣唐使(藤原常嗣・円仁らが渡航) <u>小野篁</u>(遣唐副使となるが、乗船を拒否したため<u>隠岐</u>に配流) <u>円仁</u>『入唐求法巡礼行記』(円仁の渡航日記) 894年 <u>菅原道真</u>(遣唐大使)の建議で遣唐使廃止(宇多天皇時) 廃止理由……①唐の衰退 ex. <u>安史の乱</u>(<u>安禄山</u>・<u>史思明</u>の乱)(755) ②航路の危険性・③新羅の海賊の活動・④派遣費用調達の問題 ⑤唐の民間商人の頻繁な来航(公的な交渉を続ける必要がない) 廃止後……①日本人の海外渡航は原則として禁止(僧侶の渡航は許可制) ex. <u>斎然</u>(983年に入宋した東大寺僧→宋版大蔵經・釈迦像を持ち帰る) <u>寂照</u>(1003年に入宋した天台宗僧→天台宗疑問の答釈を得るが客死) <u>成尋</u>(1072年に入宋した天台宗僧→多くの經典を日本に送るが客死) ②唐・新羅の民間商船が<u>博多津</u>に来航(遣唐使廃止後も中国の文物は流入) ★<u>鴻臚館</u>(平安京・大宰府(博多津)に設けられた外国使節の迎接施設) 907年 唐滅亡→宋(北宋)建国(960)	660年 <u>百濟</u>の滅亡(唐・新羅の連合軍が滅ぼす) 663年 <u>白村江の戦い</u>(唐・新羅の連合軍に大敗) 668年 <u>高句麗</u>の滅亡(唐・新羅の連合軍が滅ぼす) 668年 新羅使の来日(新羅は朝貢形式で日本と通交を結ぶ) 遣新羅使の派遣(天武・持統朝に遣唐使の派遣はなし) 676年 新羅の朝鮮半島統一(唐の勢力を追い出す) のち、新羅が対等な立場を主張したため緊張関係 759年には<u>藤原仲麻呂</u>が新羅への出兵を計画 698年 <u>渤海</u>の建国(沿海州の<u>靺鞨族</u>と高句麗遺民が建国) 唐・新羅との対抗関係から日本に通交を求める 727年 渤海使の来日(渤海が日本に派遣した外交使節) 日本からも遣渤海使を派遣するなど交易を行う ★渤海の宮都跡から<u>和同開珎</u>が発見されている [渤海使滞在施設] <u>松原客院</u>(越前国<u>敦賀津</u>におかれた渤海使滞在施設) <u>能登客院</u>(能登国<u>福浦津</u>におかれた渤海使滞在施設) 926年 渤海の滅亡(<u>契丹族</u>に滅ぼされる→のち遼を建国) ★のち、遼も<u>女真族</u>に滅ぼされる→のち金を建国 935年 新羅の滅亡→高麗の建国(918) 唐・渤海・新羅(途中で断交)以外の国とは 国交を結ばず、私貿易(民間商人の往来)

[NOTE]

< 勘解由使 >

< 菓子の変 > 「二所朝廷」

